# 観音

昭和59年7月
第1号
年2回発行
編集発行
小出真行

小畠山観音

ありがたや　小畠山の観世音
よるひるいつも　かげのごとくに

正観寺御詠歌

## 「同じものでも」

手をうてば下女は答える
魚はよる
鹿はおどろく猿沢の池

手をたたくだけでも様々な受けとり方があります。

同じ水でも
水⇒人間は清涼の水と見る
水⇒餓鬼は己れを攻める火と見る
水⇒天人は荘厳せる地と見る
水⇒魚はこれを空気と見る

これを一処四見、一境四心又は一水四見といいます。同じものでも機類に応じて受けとり方がまちまちでのであるということをお気付き下さい。

## 御宝号

### 「南無大師遍照金剛」

ありがたや高野の山の岩蔭に
大師はいまも　おはしますなり

「生かせいのち」のテーマのもとに、弘法大師御入定千百五十年御遠忌大法会は標高一、〇〇メートルの霊峰高野山で五十日間にわたって営まれました。

高野山ではお遍路姿や参拝者、家族連れで連日にぎわい読経や大師宝号を唱える声が絶えるときのなかったほどです。法会期間中の人出は予想の七十万人をはるかにしのぐ空前の百四万人を記録し、この大師フィーバーは連日の好天に恵まれたことも重なり、（これも弘法大師の徳でありましょう）「大師に報恩の誠を捧げん」との熱祷が宗教ブームから空海ブームへ、さらに高野山ブームへと拍車をかけたといっても過言ではありません。

### 南無大師遍照金剛とは

大師信者の皆様であれば、どなたでも「南無大師遍照金剛」というご宝号をお唱え致します。南無というのは、帰命したてまつる、帰依したてまつるという意味で、もとは、ナーモー（namo　ナマスnamas）という梵語を音に写した言葉であります。大師というのは申すまでもなく、宗祖である空海のおくり名の弘法大師の略称であります。（大師というのは古い時代には仏教の開祖のお釈迦さまを指した場合もあります。）このおくり名は、承和二年（八三五）三月二十一日にお大師さまが入定されましてからちょうど八十七年目の延喜二十一年（九二一）十月二十五日に醍醐天皇より弘法大師のおくり名が贈られました。そのとき、お大師さまが天皇の夢枕にお立ちになり、天皇にお詠みになった和歌が

たかの山むすぶいほりに　袖朽ちや
苔の下にぞ有明の月

だと「大師御行状記」に記してあります。

また観賢僧上が、おくり名の勅書をたずさえて高野山に登り、奥の院の御入定された扉を開きますと、お大師さまは今なお生身のまま入定されていますので、鬚髪を剃りたてまつりお衣をお取り替え申し上げたということであります。このとき、観賢僧上の待者の一人である淳祐はお大師さまの入定のお姿を拝したてまつることが出来ず、わずかにそのお衣の端に触れたのみだったのですが、その移り香が消えなかったということであります。今日、大津の石山寺に残っている「匂いの聖教」と呼ばれる淳祐の聖教の名前はこの話に因んだものということです。

平安時代の有名な歌謡集である「梁塵秘抄」後白河法皇撰に

大師の住所どこどこぞ、伝教慈覚は比叡の山、横河の御廟とか、智証大師は三井寺には弘法大師は高野の御山にまだおはします。

これは僧歌、つまり仏教者の生活一般に関する歌謡十三首の第一番にあるもので、当時流行していたトップ歌謡であったということから察して、入定信仰は平安時代の院政期には天下にひろまっていたことを物語っています。

そもそも、遍照金剛というのはお大師さまご自身のお名前であって、灌頂得仏のときの名号であり「高野雑筆集」に、お大師さまみずから遍照金剛と署名されたお手紙が二通、沙門遍照というお手紙が二通、遍照というお手紙が一通あるところからみると、お大師さまご自身が、この称を用いられていたことが分かります。

お大師さまは延歴二十三年（八〇四）に入唐されて、翌二十四年の六月に長安の青竜寺にて恵果阿闍梨に、約半年の間に真言密教の両部の六法をことごとく伝授されたのは、ご存知のとおりであります。このとき、入壇灌頂して胎蔵界、金剛界の両界曼荼羅の投華得仏の際に、両方ともに大日如来、つまり遍照尊に仏縁を結ばれたのです。その時の模様を「請未目録」の中で

「六月上旬の学法灌頂壇に入る。この日、大悲胎蔵大曼陀羅に臨んで、法に依って花を抛った、偶然として中台毗盧遮那如来の身上に着く。阿闍梨讃じて曰く、不可思儀、不可思儀なりと、再三讃歎したまう。即ち五部灌頂に沐し、三密加持を受く。これより以後胎蔵の梵写儀軌を受け、諸尊の瑜伽観智を受す。七月上旬に更に金剛界の大曼荼羅に臨んで、重ねて五部灌頂を受く。また抛つに毗盧遮那を得たり。和尚、敬歎したまう。」

と記してあります。

お大師さまが、自ら遍照金剛と名乗られるようになったのは、実にこのときの因縁によるもので、やがてお太師さまは、真言密教の教主である大日如来が、大師という姿をとって現われたものであり、お大師さまは生き身の大日如来として、私達煩悩の子である一切衆生を救うため永遠の活動を続けているという信仰が生じるようになったのであります。

室町時代の「大師講和讃」のはじめに

「大師は遮那の応化にて
内証の位高ければ
遍照の名を示現し
外用の十方に充ち満てり」

これは、大師は遮那すなわち大日如来が現実に仮りの姿を取って現われたのであって、その悟りの境界は非常に高いから、遍照すなわちあまねく照らすものという名前を示し現わしており、外に向ってあらゆるものにはたらきかけ、そのはたらきは全てのところにくまなくゆきわたっているのであります。

ではお大師さまに奉げる「南無大師遍照金剛」というご宝号はいつ頃から唱えられるようになったかはっきりはしていませんが、文献上によりますと、八百年前の鎌倉初期に高野山の正智院いた導範上人によって記された「秘密崇念仏鈔」の中にある、臨終用心事に

それ臨終の用心は、仏法の本懐、生死の打開なり、これによって心ある行人、皆深く尋ねて習って心蔵にをさむ（中略）

次に、大師の御影に対し奉って、啓白発願して云く、南無大師遍照金剛、哀愍加持往生極楽。それ宿善の汲引によりて大師の遺法を受け、身を大師深禅の砌に容れて、命を大師慈悲の室に終う。過現（過去、現在）の縁、すでに深く、当生（この世の生）何ぞ捨てたまはんや、唯だ願はくは浄刹（清浄仏国土密厳浄土）に引導したまえ」と記されているように、「南無大師遍照金剛」のご宝号は、鎌倉初期の秘密念仏では実に臨終の用心として用いられていたのです。

今日皆様が唱えるご宝号「南無大師遍照金剛」が皆様を密厳浄土へ導いてくれるものと私は信じてやみません。

## 「お大師さまのことば」(1)

生きとし生けるものは皆
これ我が四恩である
（十住心論）

この世の中においておそらく誰だって「私は自分の力だけで生きているのだ」と、本気で考えている者はありえないでしょう。せわしい日常生活に追われて、ややもすれば不明であるが、この世の中に生を受けたということを、よく考えてみると、実に不思議なことで、もちろん、生きている限り個人的な自由意思が働きますがしかし、この世には自由意思だけではどうにもならないものがあります。

仏教では生・老・病・死を四苦という。苦とは絶対に思うようにならないものという意味で、例へば誰でもこの世に生まれたいと思って生れて来たり、生れたくないと思って生れて来たりしたのではないことは明らかで死にたいとか死にたくないとかいった自由意思とはかかわりなしに死は必然的にやってきます。これもどうしようもないことで

大師も

「われを生ずる父母も生の由来を知らない。生を受けるわが身も亦死のゆくえを明らかに知らない。過去をかえりみると、まっくらやみでそのはじめを知ることが出来ない。未来にのぞめば、ぼうばくとしていて、そ

の終りを知る事が出来ない。」（宝鑰）

では生死に対して、私達は全くの盲目なのでしょうか。今、現に生きているというこの厳粛な事実には必然的に何が大きな力がはたらき、この目に見えない何ものかに支えられて生きていることを思わずにいられないのです。自分自身の生命の源は、横に堅に無限にひろがり、一切とつながり、一切断ちきりがたい結びつきのうちに生存しているにちがいありません。

恩とは「めぐみ」「いつくしみ」の意で、心のよりどころとなり自分のたよりとするもの、他によって自己のためにつくられたものという事である点からみると、恩とは自己を支えてくれるもので、自分のためになってくれるものという意味がくみとれます。

「心地観経」には父母のめぐみ、国王のめぐみ、衆生のめぐみ、仏法僧の三宝のめぐみの四恩が説かれています。

わが弘法大師は、正にこの四恩をもって密教の生命とされた。大師が「生きとし生けるもの皆、これ我が四恩である」といったのは、この世には四恩以外の何ものも存しない、いいかえればこの世の全ては四恩であると受け取りなさいということです。

われを生み育てたものは父母のめぐみ
われの住むことをえるのは国土、国家のめぐみ、
われをあらしめるものは一切の人々のめぐみ

さらにわれをつつんでいる目にみえない三宝の不可思議なめぐみがある。全てがわれを守り育てているのです。

そこで、四恩のめぐみにこたえるところにのみ人として生きる真の姿があり、勤労の生活があり、生き甲斐が感じられるのであり、それは自分の生命の尊さを自覚し、かけがえのない他の生命を生かす由縁でもあるのです。従ってお大師さまの教えは恩と生命の尊さを教えているのであります。

## 絆（きずな）

子供は親を選んで生まれて来ることは出来ませんし、親もまた自分の思う通りに子供と産むことは出来ません。産まれてみると親はどんな子供であっても可愛くてたまらないはずで、昔から親は子供を「目に入れてもいたくない」といった程です。子供もまたどんな親であってもわが親ほど恋しいものはないのでありますから、これは不思議な因縁というよりほかありません。親と子の間に生ずる愛情は教えられたものでもなく、強いられたものでもなく、努力して求めたものでもなく、子供が「オギャー」と生まれた瞬間に生ずる自然の感情で、これを「絆」といいます。そして、親は理性を伴った感情で子供をより良く育て親以上のものにしたいという願望が強く働き、しつけや教育に苦心惨憺し、あらゆる犠牲をはらっても育てます。子供はそれを当然のことのように思はず、恩として受け取り、その恩を良い方向に伸ばして行くのが本当の孝行であり悪い方向に曲げて行くのが親不孝なのであります。子供にとって親ほど精神生活を強く支配しているものはありません。それは、親が生きている間より、むしろその死後において一層強められていくのであってある人が「父母の墓前に立つと、不思議に他の場所で得られない反省や勇気が湧いてくる。ことに命日に墓前に立って父母の臨終の姿を思い出しその生涯を思い起こすことは私にとっていつも励ましと教訓になる」と述べています。

私達は親の命日やお盆、お彼岸にお墓参りを致しますが、これを単なる習慣的行事と考えないで、人間としてなさなければならないことであると肝に銘じ、真面目に実行することによって、自分自身が向上進歩するものであるということをもう一度見つめなおしてほしいものです。

## 編集後記

かねてから計画しておりました正観寺通信「観音」をやっと発行するはこびとなりましたが、これからは皆様の様々な意見、考え、人生論等も記載致したく思いますので宜しくお願い致します。